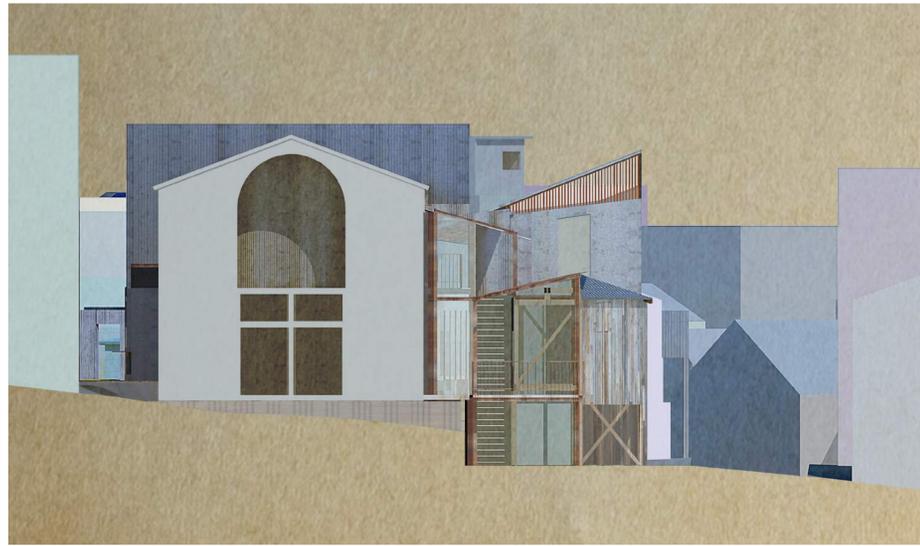


『伝播する建築』

—風を手掛かりに生活を再編する方法
G.Clément 『動いている庭』をヒントに—



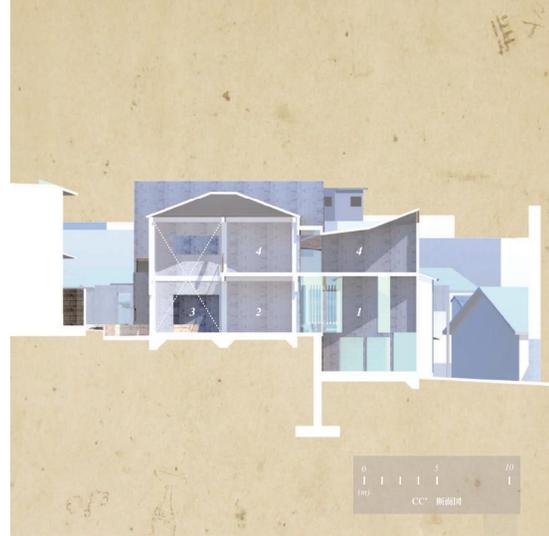
PHASE 1

酒造は、この街区にインストールされる最初の一手である。成田の地場に根付く産業としてのみならず、酒を契機としたコミュニティの形成を目論む。

現在空き家となっている角地の空き家並びに活用されていない「生涯学習センター」を改修しつつ、新たなボリュームを挿入する。

街区を規定する塙＝敷地境界に覆いかぶさるように置かれたガラスのボリュームは、この街区に新たな振る舞いが根付くことによる次のサイクルの始まりを告げる。

既存の両ボリュームは酒造の工程に合わせて改修され、風のグリッドに沿った形で幾何学的なボリュームを計画する。この幾何学は、風を流すかたちとしてデザインされるが、既存の屋根並みと共に風を受けつつも、屋根並みに埋もれない「屋根並みに見えない屋根並み」をめざした。その「ずれ」たかたちが、まさに感受性をもたらす。



Gilles Clément

本設計は、敷地に閉じ、社会の状況や生活様態の変化に対して柔軟に対応できない建築を批判し、より社会に開かれ、社会的な問題解決の手立てとなるような建築を設計するための方法論を実践するものである。

本設計はその一例として、とあるまちに存在する「所有に関する問題」を発見し、その建築的解決を試みる。それに際し、「動いている庭」(Gilles Clément) の概念を援用し、建築が環境へと影響を与え、その建築もまた影響を受けることで変化し続ける都市空間を提案することによって、建築的に問題を解決する。環境の変化に柔軟に対応し、変化することが出来る建築空間の提案であり、それによって社会や人々の要請に応えられる建築を設計し、(BeIM 建築設計方法論) の有効性を示そうとする試みである。

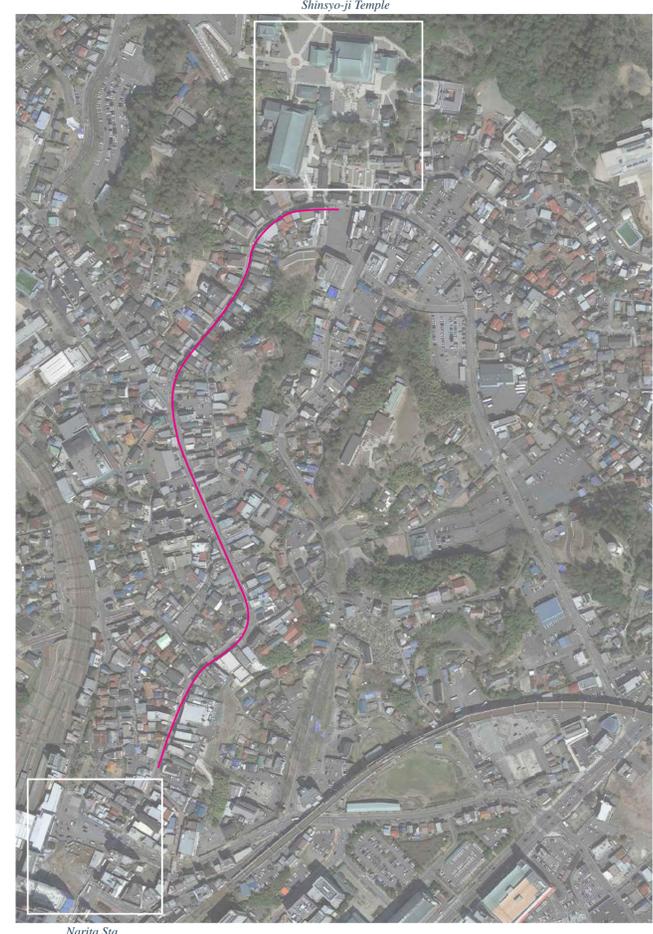
世界が「オブジェクト」で構成される Built-environment (人工環境) であるという立場からは、建築による影響は敷地境界線に囲われたハードな環境だけではなく、影や風や見合いなどといった、流動的で動き続けるソフトな環境にまで及ぶ。建築が固定的で限定的な敷地主義を越え、流動的かつ広域的な視点で建築を志向することによって、「開かれた建築」を構築することが出来る。

ここで目指されている状況はある種の庭と同じであるように思う。ただしそれは不完全な状況に放り出された放棄された庭である。一見秩序のない荒地、唐突に現れる植生、放棄されたフォリーなどが混在し、無秩序が支配している状態。だがそこには固有の関係が存在し、新たな始まりを予感させる何かがある。ここでは、フランスの造園家/修景家 Gilles Clément の「動いている庭」という概念とその取り組みを紹介し、敷地主義を越えた開かれた建築のヒントとした。

【動いている庭】では、3つの重要な状態がある。
【極相】 「植生の最適な水準」の状態ことである。この状態を「停止」と捉えず、新たなサイクルの始まりと見る。
【ずれ】 環境に現れた違和感を生じさせしめる現象のことである。それをあらかさまに強調することで、「観察のダイナミズムをとり戻させる」操作である。スケールとリズムの2つの要因がある。

【放浪】 二年草など、幾度の越冬をする植物はその種子を様々な方法で広範囲に拡散させるため、思いもよらずに生えてくることがある。これを「均衡を破る力」として積極的に捉えている。「ずれ」の契機となる現象である。

既に植生している生態系を説解し、植物が広がる自然の力を抑え込むことなく、過度の無秩序を人間の手によって管理する方法である。この仕方を建築設計に援用する。



計画地は千葉県成田市。成田山新勝寺を中心とした門前町が展開する歴史あるまちで、現在でも多くの人々が訪れる。私には成田市は馴染み深い場所、祖父の墓があることから何度も足を運んだまちである。駅前から新勝寺をつなぐ表参道沿いに活気ある様相を呈している。

特に夏の祇園祭はまちのエネルギーが凝縮した行事である。朝から深夜まで続く勇壮な祭り、成田の町々から能出で祭りを盛り上げる。11の山車が成田山の山門前を出発し、高低差20mの坂道を、動力なしに一気に駆け上がる様はまさに圧巻である。そうして一年の商売繁盛を感謝するのである。商売と生活が一体となった成田特有の祭りである。

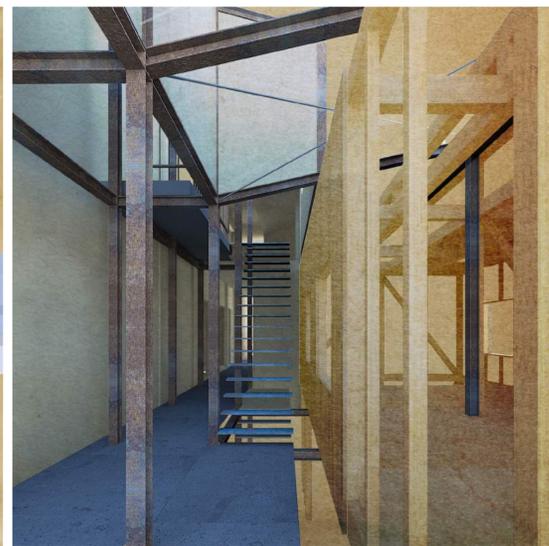
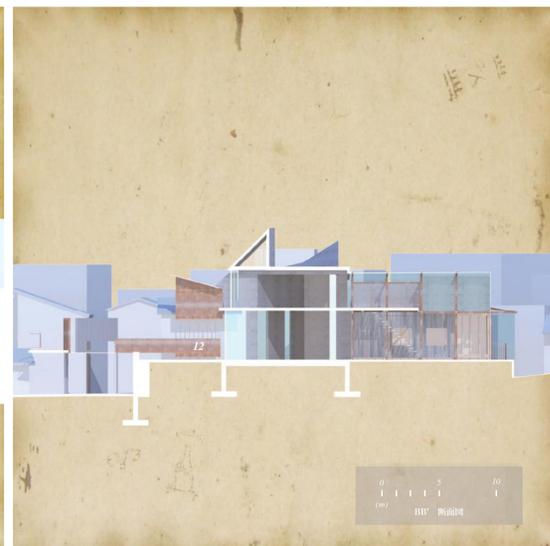
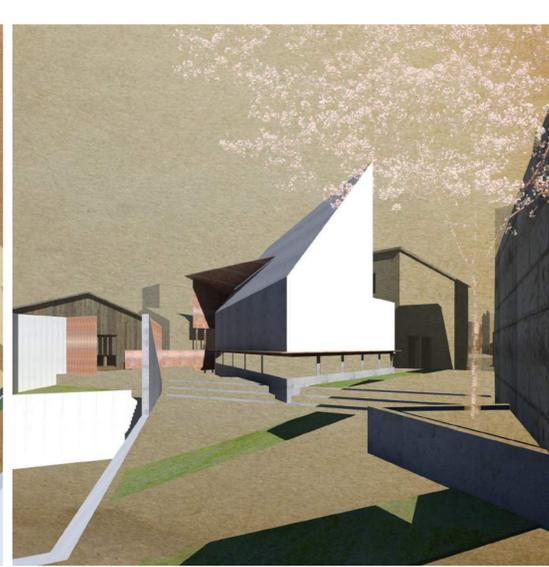
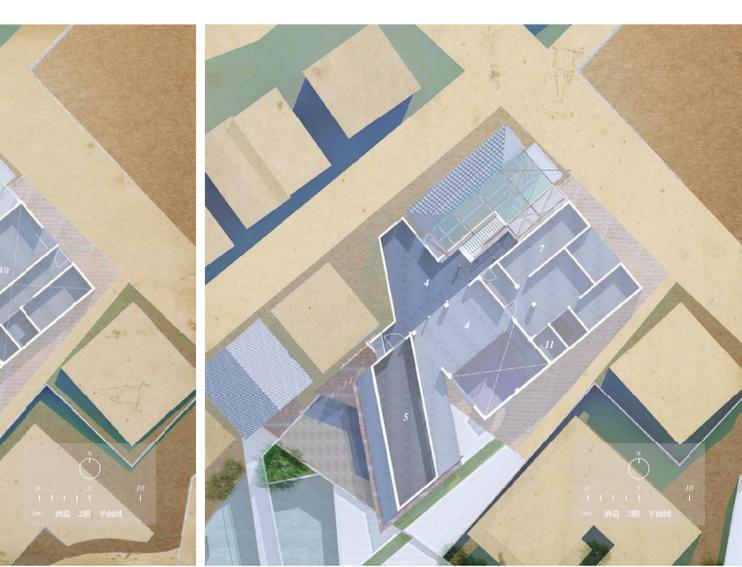


だが、私にとってはとあるシーンが非常に印象深いまちでもある。成田は父の生まれ故郷でもあり、生家が今も残っている。表参道から一本道を入ったところその家は、国道のような階段が上がった先で荒れ果てていたのである。



しかし、その荒れ果てた空き家のシーンはなんら物悲しい印象を抱かせなかった。むしろ参道のぎざぎざは吸い込まれたように小さくなり、にぎわいのさざ波の中で放棄された家がぼつねんと立っ姿が、なぜか柔そうに見え、なんらかの「力」を持っているように感じた。

なぜ業しそうなのか？ここに宿る力を使えないだろうか？これが本設計の動機である。

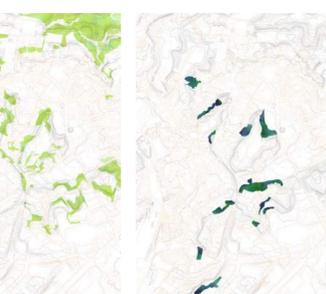
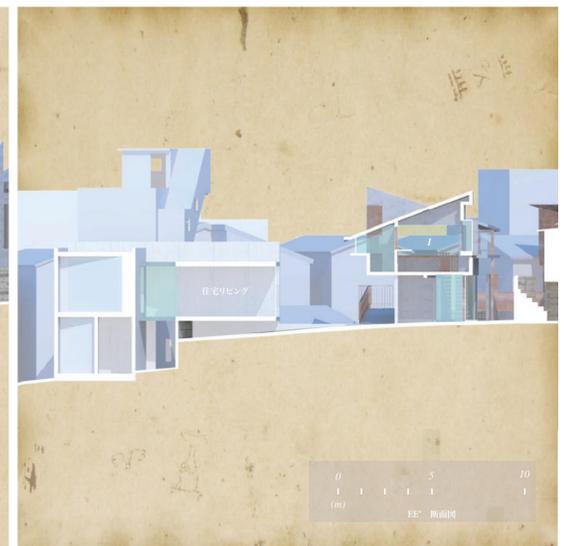
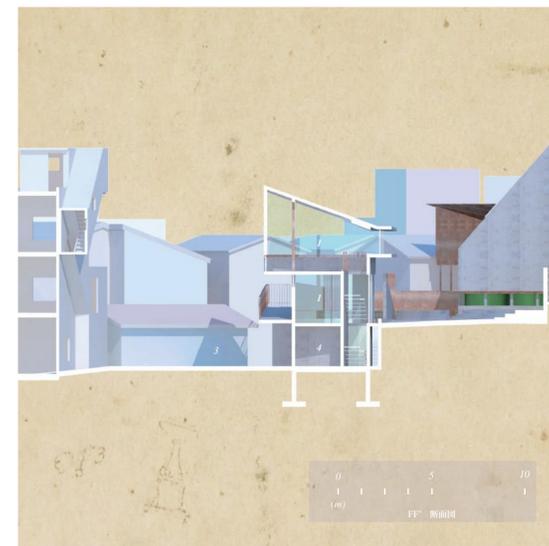


PHASE 2

酒造がつくられた後、つくられた酒を直接振舞うレストランを計画する。「スペイン」によって4象限に分けられた中で、それらをつなぐための場である。このレストランは酒と人をつなぐための場であり、「中庭」へと人を呼ぶきっかけである。

「スペイン」に沿って、壁としてそれぞれの領域を仕切りながらも、街区外から見たとき、人を迎え入れるゲートとしての役割をもたせた。酒造蔵のボリュームに呼応し、変型片流れの屋根とした。四方に対して空間が開け、主階からは「中庭」の状況を見渡することができる。

敷地の中央に位置するこのボリュームは、「風のグリッド」と「既存のグリッド」が重なるまさに中心に位置する。それらの諸力が衝突する点は、最も活力に溢れる点である。ここを中心に、「中庭」の状況を感じられ、周囲へと振る舞いが波及するようなアフオーダンスを秘めたゲートをつくる。



土地利用分析

成田は非常に緑豊かなまちであるという印象を抱かせる。新勝寺周辺はもちろんであるが、まちの所々に山肌植生する林の名残として木々が偏在し、昔に山を拓いて、擁壁によって補強されていないところには、土を保つための竹林を植生するなど、緑が目立つ町である。しかし、成田の特徴は、個人の商店ないし住宅の敷地内で緑が豊かであると言うことである。これは、成田が個人の町であることによるのではないだろうか。

成田は古くから商人の町として発達し、農民も特産的に商売を営むことを認められていた。成田山という大きな庇護のもと、山を拓いて家をつくったところに、自ら植生を復活させることで、成田全体の環境を維持していたのではないだろうか。成田のボトムアップ的な都市形成の過程を示していると言える。

一方で、駐車場や空き地が増加しているのにも目にする。かつてはほとんど存在しなかった空き地が、少しずつ増加してきている。



地形分析

成田は、インフラの中心であるJRならびに京成電鉄成田駅前のロータリーと、宗教的中心である成田山新勝寺の2つの極を持つ。この2つの極を表参道が繋ぐ。この2極の間を断面的に見てみると、ロータリーから少しづつ下っていき、新勝寺の山門まで単純に下降していく。新勝寺山門前とロータリーの間には、20mの高低差があり、成田の地形的な重層性が特徴であることがわかる。

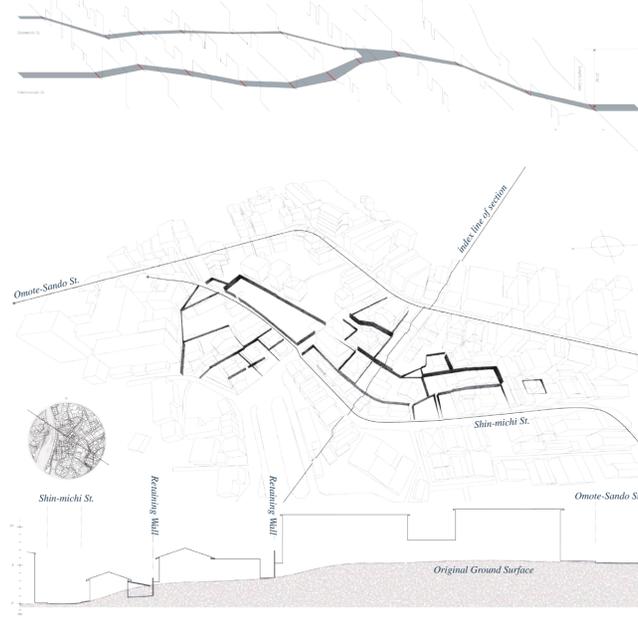
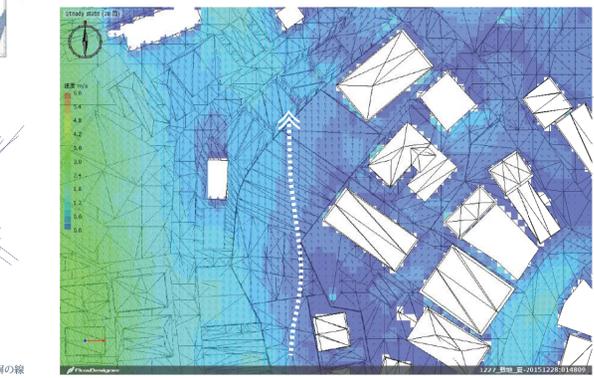
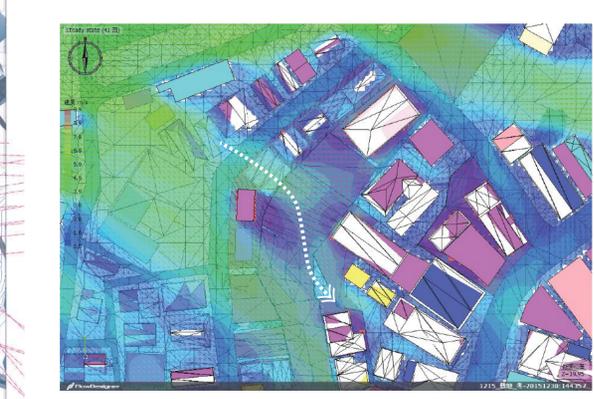


風の解析

扉や建物といったハードな環境とは別に、柔らかい環境としての風の流れをCFD解析アプリケーション flow designer によって解析する。

夏の風と冬の風を解析すると、とある軸によって規制されていることがわかった。大まかに風の流れる方向を指示したのが、波線の矢印である。この矢印は夏の風も冬の風も一つの軸に取束している。

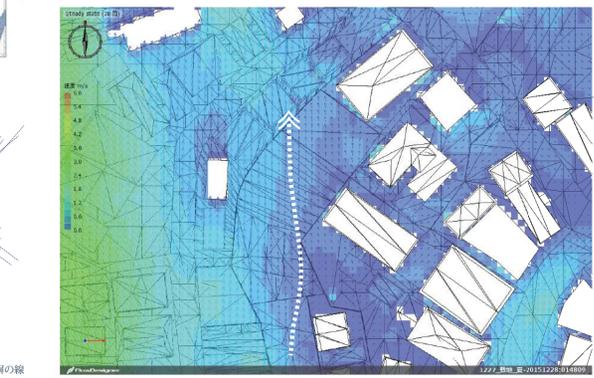
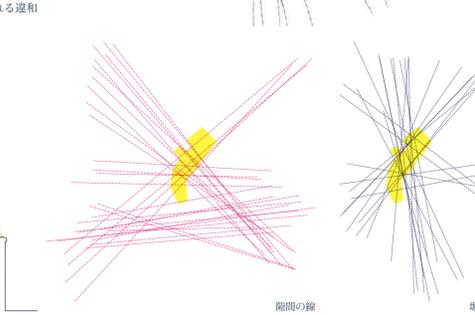
「中庭」内では、冬も夏も北西-南東方向への規制力が働いている様に見える。これはこの敷地の支配力の一極ではないだろうか。不可視な風の流れが「中庭」にある種の秩序を与えている。

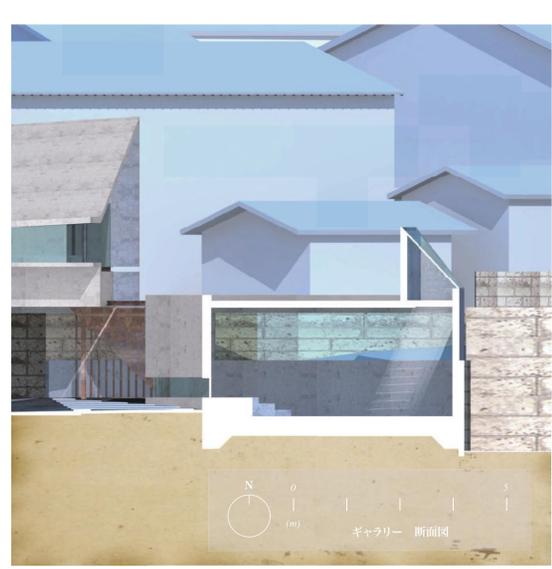


「ずれ」

5mの隔たりを分節する擁壁は、成田の地形的な重層性を最も端的に表す土木的構築物である。それは端的であるからこそ、過剰なほどに成田の地形的特徴を詳らかにし、ついにはこの街区固有の質を生み出している。

この擁壁は、すでに環境に対してある力を与えて、場の力関係に影響を与えている。擁壁はどのような規制力を環境に対して発しているのだろうか。この規制の圧力こそが、この場に固有の質を生んでいる。擁壁が生んでいる特殊な状況は、周囲との差異＝「ずれ」から生まれる違和感のある状況である。この違和感とは、街区内に余白が存在し、連続的な関係が切断されているという発見。小さな街区の中に立体的な微地形が隠れているという驚きである。この空地はあらゆる方向から規制を受け、街区全体の諸関係を受け入れることのできる留保地、極相に至った「庭」なのである。

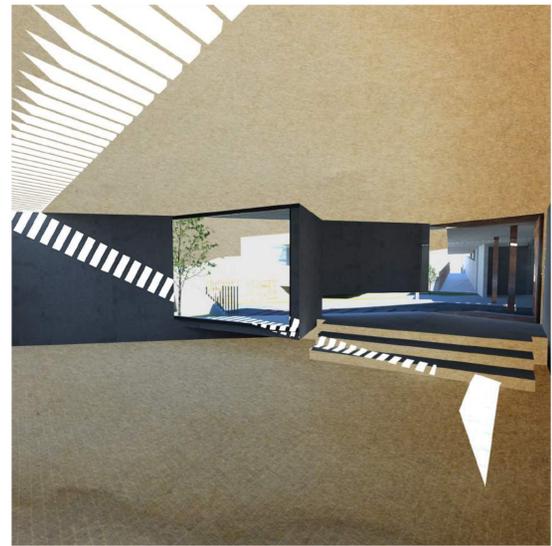




↑ PHASE 4

phase3でふるまいが周囲に波及したのち、それは再帰して新たな建築の契機となる。地域に開かれた「中庭」に多くの人々が訪れるよう、自由に使えるギャラリーを計画する。これは一連の「中庭」の計画のひとつの終わりであり、これにてこのサイクルは「極相」へと至った。今後、「中庭」、そしてこの街区とまち全体がまた次のサイクルへ向けて変化していく。

ギャラリーは人々を誘い入れながら、「中庭」のサイクル、このひとつのエコシステムがひとまず安定したことを示すための「締める」ボリュームである。「スパイン」と既存の壁から延長するように伸びる壁によって中へと誘われる。「中庭」の端に位置する小さな庭は、「中庭」のふるまいを外へ伝えるためのアンテナである。大きく開閉するスライディングドアがギャラリーと庭を繋げ、「中庭」とまちが連続していることを人々に伝えるのである。



↓ PHASE 3

酒造とレストランによって、再び都市空間として姿をあらわにした「中庭」の状況にตอบสนองするように、周辺へと活動が広がっていく。

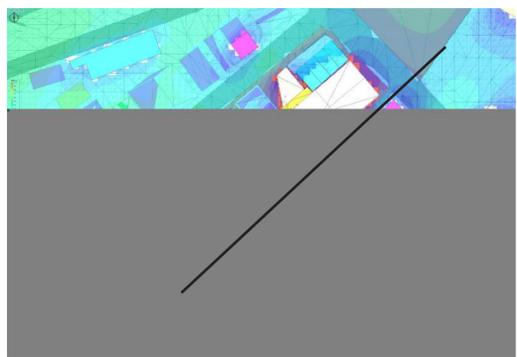
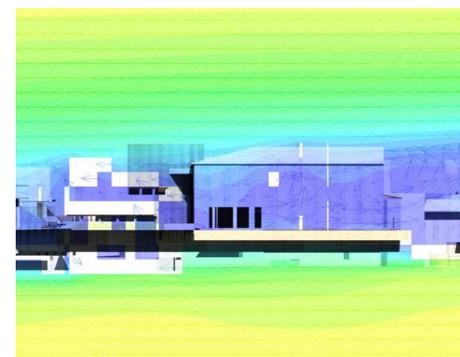
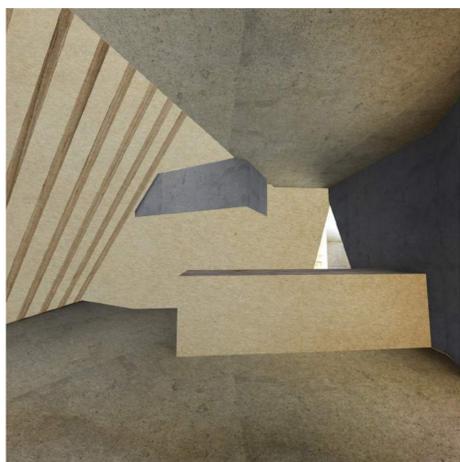
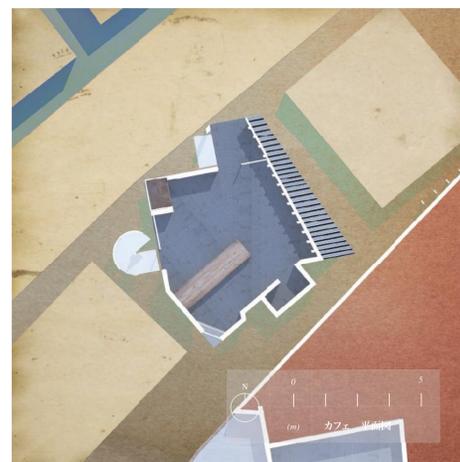
広がるボリューム
ここではモデルケースとして2つの建築を想定する。空き家を「スパイン」にそって伸びる回廊からアプローチでき、新道から「中庭」へアクセスできるようなカフェとし、既存の美容院に沿うように若者向けの美容院をサンクンガーデンに計画した。

〈風のグリッド〉

風の流れは、本来の風向と周辺のボリューム、そして解の影響で、「中庭」を横切るようにして北西-南東軸にそって流れることがわかった。

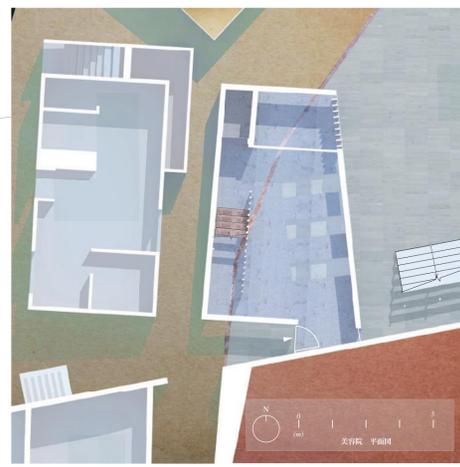
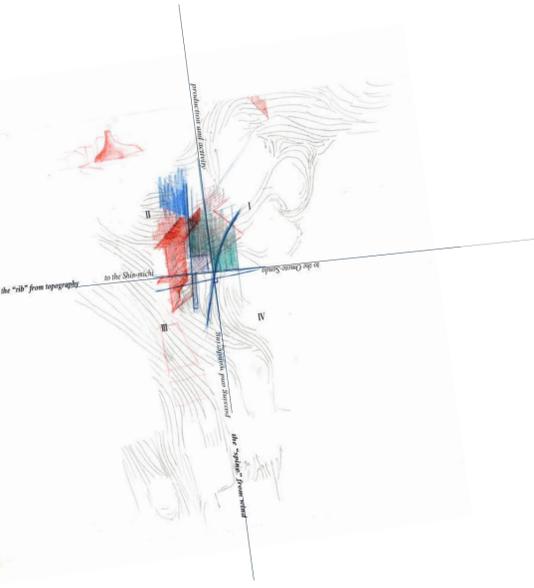
この街区を風の流れという視点で捉えた時、この軸に沿って「風のグリッド」のようなものが敷けるのではないだろうか考えた。建物や解などのハード力ではなく、千変万化の空気の流れから導かれる規制力、それがこの敷地の新たなサイクルをつくる力のひとつとなる。

「風のグリッド」と「既存のグリッド」が重なり、新しい秩序と古い秩序が並存しながら、次のサイクルが回り出す。2つの秩序の「ずれ」は、環境に対する感受性を脇起し、まちの活力を引き出す。



風解析

風解析の結果、酒造脇の路地から北北東の風が吹き込んだ時、酒造蔵のボリューム付近で風が吹き上がり、敷地の南西側へ流れることがわかる。醸造の香りが「中庭」を流れることが確認された。



『伝播する建築』

敷地に存在する2つの秩序を見出した。一つは誰の目にも明らかな秩序、もう一つは目には見えない秩序である。この秩序の「ずれ」を表出させ、両者の距離感を設計するというデザイン行為こそが、本設計における「庭」である。

「中庭」は一つの極相へと至った。このふるまいがまちへと伝播し、そしてまた、次のサイクルが始まる。いつの日かまた朽ちる時が来ようとも、その時はその「極相」に新しい秩序を重ね、「ずれ」を創れば良い。

その時この建築は匿名化し、無名の秩序となることによって、真に「庭」となるのである。